

*「楽しく学ぶ身体所見－呼吸器診療へのアプローチ」 近畿大学医学部堺病院・内科学教授 長坂行雄 著



沖縄県立南部医療センター・こども医療センター 副院長 當銘 正彦

何と言おうと、丁寧な病歴の聴取ときめ細かな身体所見の観察・評価は医療の基本であり、且つ王道である。そこから導き出された診断に、治療を繋げるのが一般的な診療の手順であるが、折しも診断が困難な場合、或いは幾つかの鑑別診断が要求される場合に諸種の検査が必要となる。その意味で検査は診断を補助する大切な手段ではあるが、昨今の時勢では、検査は診断に必要不可欠な、あたかも医療の主役であるかの如き検査至上主義的な印象を強く感じるものである。確かに、検体検査、画像診断、光学機器等の華々しい開発は、基本的には生物学である医学を化学的、物理学的な分析を通して科学へと押し上げる多大な貢献を果たしていることに間違いはない。しかしながら、どんなに物理学、化学、生物学による科学的分析が発達しても、医学の対象となる人間の病態を的確に把握する為には、病態の継時的な変遷である病歴とその現象的な表現である身体所見をしっかりと診ること以外、確かな術は無いのである。

今年10月に上梓された長坂行雄先生のこの本は、呼吸器疾患を中心とした様々な疾病の身体所見を病態生理学的な裏付けによって丁寧に解説し、その診断学的意義を理解することを目的として書かれたものである。私は、個人的にも県立中部病院・宮城征四郎門下の一員として敬愛して止まない長坂先生であるが、本書は氏の臨床家としての一貫した実践的な診療スタイルから導き出された知識と知見が全編に横溢する好著に仕上がっている。

本の構成は診察の仕方の実際（CDROMつき）、症状の生理学、そして症例を呈示しての

具体的な解説となっているが、ふんだんに「挿話」や「Column」も織り込まれており、飽きる暇もなく読み進むことのできる工夫が心憎いばかりである。読者は、タイトルの“患者を診ることの楽しさ”が文字通り沸々と湧き上がってくることを、必ずや実感されるでしょう。

従って本書は、ひとり呼吸器科医のみならず総合内科医や研修医、そして開業されている先生方の内科的一般常識としても大いに役立ち、また心肺相関の生理学的観点からは循環器科医にとっても、非常に参考となる良書であるものと、自信を持って推薦したい。

